慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	デイヴィド・マックルラン著『少壮ヘーゲル学派とカール・マルクス』
Sub Title	David Mclellan, The young Hegelians and Karl Marx
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.10 (1969. 10) ,p.121- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19691015-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

David Mclellan, The Young Hegelians and Karl Marx

London, Macmillan, 1969, ix＋170 pp.

デイヴィド・マックルラン著『少壮ヘーゲル学派とカール・マルクス』

ここに紹介するデイヴィド・マックルランの『少壮ヘーゲル学派とカール・マルクス』は、標題の示すように、マルクスの初期の思想形成との関連において、少壮ヘーゲル学派を取り扱つたものである。本書は、従来ヘーゲルとマルクスという主役のいわば傍白（わきぜりふ）として、とかく演出効果の役割をしかあたえられていなかつた人びとに照明をあてた稀な研究として注目されてよい。著者自身の言葉によれば、「以下の研究は、思想史においてますます明白な間隙となつているものを満たすべく意図されたものである。ヘーゲルの弟子たちは、たとえ急進的な者であつても、師の翳を必然的に分ちもつていたのだが、ヘーゲルへの関心が最近著しく復活したことは、彼の追従者に対する新たな考察を正当づけている。マルクスの初期の作品の幾つかが出版され、ひき続いて起つたそれらの議論のためにこの時代は近頃注意を惹くようになつてきた。これらの議論では、マルクスと少壮ヘーゲル学派の同時代人たちの思想についての言及は、ほんのついでに行われているにすぎぬ。この研究では強調点を逆にした。主導的な少壮ヘーゲル学派の思想はそれ自体で重要なものだし、同時にまた、マルクスの思想の生成を理解するには、彼の青年期の思想風土の幅広い研究によつて一層容易になるだろう、と信じるからである」と。

《少壮ヘーゲル学派》という名称について、著者は明確な説明をあたえていないが、その「序論」において、彼らの系譜と動向とが概括的に述べられている。ヘーゲル死後、いわゆるヘーゲル学派のなかには内部的対立があつた。それを尖鋭化させたのは『イエスの生涯』（一八五三年）のダーヴィト・シュトラウスであつた。当時のフランス議会の政治的区分を借りて、左派、右派、中央という直喩を用いたのは彼自身であつた。ヘーゲル左派に属する人びと、ヘーゲルの弁証法的否定性の原理によつてヘーゲル哲学そのものを克服しようとした急進主義者たちが、いわゆる少壮ヘーゲル学派と呼ばれたのである。彼らは『ハーレ年誌』『ライン新聞』などによつて、宗教および政治に対する激越な批判を展開した。その最盛期は、著者の見解にしたがえば、一八四〇年頃から四四年末までの短い間、すなわち、フリードリッヒ・ウィルヘルム四世の即位から、ギゾー政府によるマルクスのパリ追放までということになる。

彼らはひとつの《運動》として存在しつつも、その思想傾向はさまざまであつた。だが、神学上の論争においては無神論を、政治哲学においてはプロイセン政府を批判する《哲学的ラディカリズム》を主張していた。フランス革命の影響を受けて、現実変革への実践（プラクシス）の志向を強くもつていたことも共通している。それだけに、政府の側からの反動政策、検閲制度も厳しさを加えた。一八四三年には、さきにあげた雑誌はともに発禁を余儀なくされ、少壮ヘーゲル学派は解体の危機に瀕する。これを決定的なものにしたのは『独仏年誌』の失敗である。アルノルド・ルーゲとマルクスは新しい雑誌の構想を抱き、パリの社会主義者たちとの協力を得ようとしたが折合わず、結局、一八四四年三月、ドイツ人の寄稿のみによつて創刊号にこぎつけることができた。この最初にして最後の一巻が、少壮ヘーゲル学派の最後の出版物となつた。資金上の困難に加え、さらに深刻な思想上の対立のため、爾後、マルクスとルーゲ、ルーゲとヘスは決裂する。やがてマルクスはフランス革命の研究に没頭し、四四年九月エンゲルスとの出逢いにより、経済学研究に注意を向けることになる。そして、エンゲルスとの共著『聖家族』は、少壮ヘーゲル学派、とりわけブルーノー・バウワーに対する批判となるわけだが、すでにその刊行以前に、ブルーノー兄弟は筆を折つていた。

ついでながら、カール・レヴィトは少壮ヘーゲル学派について、「彼ら相互間の関係の特徴は、相互の錯綜の経過において互いに相手を凌駕しようとしていることである。彼らは時代が彼らに提出する問題を極端にまで推し進め、致命的な結論をもつものになる。彼らは共通の反対によつて互いに結びついているだけなので、個人的ならびに文筆上の同盟を解いて別れ別れになることも同様にたやすく、一旦別れると持前の急進主義に応じて互いに〈俗物〉だ、〈反動〉だと罵り合う。フォイエルバッハとルーゲ、ルーゲとマルクス、マルクスとバウエル、バウエルとシュティルネル、これらはそれぞれ一組の仇兄弟で、いつ互いに相手を仇と認識するかは偶然が決定する」（『ヘーゲルからニーチェへI』〔邦訳　岩波書店八五―八六頁〕）と述べている。いささか冷笑的な評価である。むろん、偶然が決定することもあつたのは事実だが、やはり少壮ヘーゲル学派のイデオローグの思想構造の相違が重大な問題として揺曳していたことは、本書の著者マックルランが明らかにしているところである。「序論」につづいて、ブルーノー・バウワー、ルードウィヒ・フォイエルバッハ、マックス・シュテルナー、モーゼス・ヘスが箇別的に取りあげられ、彼らの生涯と思想が論じられている。ここでは、マルクスとの係わり合いについて要約するにとどめる。

マルクスはボン大学でバウワーの講義に出席した。彼が博士論文を書いた頃は、バウワーの影響に負うところ大である。だが後者はなによりも先ず神学者であつた。バウワーは宗教を人間の自己意識の発展とみなし、意識の疎外形態として宗教を把えた。ちなみに、《自己疎外》という言葉は、少壮ヘーゲル学派に一般化した用語であるが、これはバウワーの造語なのである。有名な「人民の阿片」という比喩も『自由の大義』や『キリスト教国家』にみられるものだ。『ヘーゲル法哲学批判序説』を執筆中のマルクスは、バウワー

の宗教批判を念頭に置いていたことは確かである。冒頭の言葉、「ドイツにとつて、宗教の批判は本質的に終つている。そして、宗教の批判こそいつさいの批判の前提なのである」ということは、宗教的疎外が他の人間事象における疎外現象のプロトタイプをなすことを明示している。その後のマルクスの批判作業には、バウワーの影響を見逃しえず、主題の相違でこれを曖昧にすることはできない。

神学の秘密が人間学（アントロポロギー）であることを喝破したフォイエルバッハの『キリスト教の本質』のなかに、マルクスは、その宗教批判の意義以上に、ヒューマニズムを認めた。ただ人間的なもののみが真であり、現実的である、とするフォイエルバッハは、ヘーゲルの思弁哲学、その抽象作用による人間自身の疎外を徹底的に否定し、人間的本質を把握した。しかもそれを類的存在（Gattungswesen）として。『哲学改革のための暫定的テーゼ』および『将来の哲学の根本問題』は、『経済学・哲学手稿』に深く影響をとどめている。労働の疎外ばかりではなく、コミュニズムの概念は、フォイエルバッハの自然と人間、感性としての人間についての考え方をそのまま反映している。マルクスはフォイエルバッハの偉業をつぎのように要約する。第一に、哲学は思想のなかにもちこまれた宗教であつて、人間的本質の疎外の別な一形態であること。第二に、真の唯物論と現実的な科学に基礎を置いたこと、「人間の人間に対する」社会関係を根本原理としたこと。第三に、絶対的に肯定的なものを主張する否定の否定に対して、おのれ自身に基づいた、積極的におのれ自身のうえに打ち建てられた肯定的なものを対置したこと。しかしながら、彼のフォイエルバッハ批判は、その実践性への欠陥、『フォイエルバッハに関するテーゼ』に明らかであろう。

「僕は僕の力の所有人である。僕が自分を唯一者として知る時にそうである。唯一者において、所有人その人さえも彼の母胎である創造者的虚無に帰る。……もし僕が唯一者である僕自身に関心をおくならば、そのとき僕の関心は、自己自身を消費して、やがては死すべき、かりそめの、その関心の創造者の上に留まるであろう。そこで僕は言うことができる。僕は何物にも無関心だ。」このように、『唯一者とその所有』は始まると同じように終る。これは、ヘーゲル哲学の自我の奇態な帰結であり、ブルジョワ的エゴイズムの極致であろう。しかしそれだけに、聖マックスは、『ドイツ・イデオロギー』の批判にみられる通り、化け物であり、かつ社会主義に対する最も危険な敵でもあつた。それは読むに価すると言つてはあまりに大袈裟であるが、なぜそれに頁を割いているのかを訊すことがまさに価値あることなのだ、と著者は書いている。

シュテルナーの経済的理念、とりわけコミュニズムがマルクスに影響を及ぼしたかどうかは疑わしいが、モーゼス・ヘスとの関係は明瞭である。とくに『貨幣の本質について』は、フォイエルバッハの宗教的疎外を社会・経済生活の領域に適用したものとして重要であつた。その私有財産制への批判はヘスに負うている。実際の交渉はむしろエンゲルスの方が親密ではあつたけれども、マルクス自身『経済学・哲学手稿』の序言でこう記している。「いうまでもないことだが、私はフランスとイギリスの社会主義的著作をもまた利用し

た。だが、この科学のための、内容のある独創的なドイツ語の著作は結局――ヴァイトリングのほかは――『二十一ボーゲン』にのせられたヘスの諸論文と、『独仏年誌』のなかのエンゲルスの『国民経済学批判大綱』しかないことになる。『独仏年誌』のなかでは、私も同様に、本稿の基礎的な最初の諸要素をまつたく一般的なしかたで略示した」と。ここにいうヘスの論文とは「社会主義と共産主義」「行為の哲学」などである。

さて、著者が結論として述べているように、マルクスの思想もまさに時代の産物であり、以上の多彩な同時代の思想家の影響を逃れなかつた。しかし、彼はその誰よりも俊敏であり、彼の思想的偉大さをいささかも減じていないのである。『ドイツ・イデオロギー』のなかの言葉を引こう。

良心あるドイツ人の胸のなかにある一種の自己陶酔的な国民感情を呼びさます哲学上のこの誇大自己宣伝の本質を正当に評価し、この少壮ヘーゲル派運動全体のみみつちさと地方的偏狭さ、とりわけこれらの英雄どもが実際になしとげた業績とこれについての誇大なイリュージョンとのあいだの悲喜劇的なコントラストを如実に描き出すためには、このスペクタクル全体をドイツ以外の立場から改めてとつくりと眺めて見ることが必要である。

マルクスはそれをやつてのけた後の時代になつてみれば、さながら青春時代の回想にも似た、崇高なものを打ち砕こうとするあの知的残忍さをもつて。

（奈良　和重）

A・B・ウラム著（奈良和重訳）『未完の革命―工業化とマルクス主義の動態―』

本書は Adam B. Ulam, *The Unfinished Revolution: An Essay on the Sources of Influence of Marxism and Communism*, New York: Random House, 1960 の全訳である。著者ウラムは、ハーバード大学教授として社会主義思想史、ソヴェト外交史を講ずるかたわら、同大学ロシア研究センターの研究員として精力的な研究活動を続けている中堅クラスの政治学者である。

さて、本書は、そのサブ・タイトルからも分るように、工業化とマルクス主義との関係を解明しようと試みた点に特色がある。この問題の解明へと著者を駆りたてたものは、「マルクス主義がある社会において生き、かつ適切なものであるのに、他のところでは社会主義と共産主義が取るに足らない党派、もしくは知識人集団の信条にとどまつているのはどうしてか」（著者まえがき）という極めて常識的な疑問であつた。マルクス主義が高度に工業化された西欧にではなく、工業化と近代性をめざして暗中摸索しつつある非西欧社会に主として勝利を得、影響をおよぼしているのはなぜか？　この常